

(記念講演録)

## 博物館学の将来にむけて

全日本博物館学会名誉会長 樋口清之

博物館学の講座を始めて早いもので十数年経ちます。加藤先生や下津谷先生と相談して博物館学の講座を開いたのですが、実は私の専門は博物館学ではなく考古学なのです。しかし、いろいろなところに参りますと、博物館に与えられている使命や役割が、いかに必要であるかということを感じておりました。そして今でも興味と関心を持ち続けております。

私の郷里は奈良県です。三輪山という円錐形の山がありまして、回りにはたくさんの遺跡が残っているところです。日本で最古の前方後円墳の「箸墓」があります。子供の頃に自由にその中へ入って遊んだ思い出があります。それが後の勉強につながろうとは夢にも思いませんでしたが、今ではそこが有名な所となり、中へは自由に入れなくなりました。

遺跡の中で生まれ、そこで遊んだことから自然に考古学に興味を持ち、結局はそれが生涯の仕事となりました。そしてこれからも考古学を勉強していこうと思っております。

実は夕べも徹夜してしましまして、少しフラフラしております。しかし、このようなおめでたい席で、久し振りにお目にかかるなつかしい方々の前で感想の一端をお話出来ることを大変喜んでおります。

博物館は今でこそ大きな意味を持っているといえます。社会教育が社会生活の上で一つの重要な要素であるといわれるようになり、それと共に博物館学の必要性についても皆が認めるようになってきました。東京の各区でも、博物館のないのは渋谷区ぐらいではないでしょうか。新潟県の佐渡では、以前に地図で調べたことがあります。14もありました。あの小さな島に14という人多すぎるように感じますが、郷土意識といえますか、その土地の遺跡等を保存しようという目的と公開しようという気持ちがあったのだと思います。そして博物館が14も出来たのでしょう。

しかし、博物館の利用についてはどうなのかという心配になります。これが次の大きな使命であるといえます。これからは博物館を作ることと同時に、如何に生活の中で役立つのか、教育の方面でどのように利用出来るかを考えることが大切になってきます。

私がヨーロッパの博物館を廻って大変感心したことがあります。特にロシアの博物館についてですが。ロシアの博物館については一般にあまり紹介されていませんが、しかし数の上でいいますと、モスクワが世界で一番博物館の数が多いのではないかと思います。これはほとんどが革命博物館といわれるものです。ロシア革命の時の勇士が犠牲になった場所で、たいていアパートの一室なのですが、それが博物館になっている。そこには血痕のついた衣服が置いてあったり、本人の写真、遺影が飾ってあり、そういう記念的な設備を革命博物館といっている。そしてそれは、全部廻ることが不可能な程無数にあります。

しかし、肝心の私達が見たい健康的な歴史の流れとか文化の変遷を展示した博物館は絶無に等しいのです。私はモスクワ大学に泊まっていたのですが、モスクワ大学は非常に大きな建物です。その中に博物館があります。その博物館は一般に公開していますが、仕方

なく公開しているのです。モスクワ大学の建物は丘の上にあります。間口は何十mか何百mかわかりませんが、正方形の敷地の中に建っています。その中には各学部が全部入っており、学生の宿舎や、教職員や従業員の家族の宿舎も入っている。そして劇場や浴場もあれば娯楽場もあり、いろいろの物がある理想的な新しい都市を実現した形といえます。そこに博物館がありました。その博物館が私が初めて行き会った系統的にロシアの文化を説明した博物館でありました。やっぱりこういうものがあつたのだなと感心したのですが、旧石器時代から始まって、いや旧石器に平行して化石資料がたくさんありましたから、多分地質年代から始まったのでしょうが、その中でやがて人類が生まれて、そして石器時代からだんだんと進んで集落が出来て、やがて農耕社会に入り、その順序がどこでもやることですが、それはソビエトを例にとり実際の場として展示した博物館でございまして、入館料はただでございました。だいたい世界で入館料を一人前にとってるのは多分日本ぐらいでしょう。私は日本の国立博物館は無料でも良いのではないかと思います。展示されている物は明治政府が権力にまかせて集めた物が中心であり、もちろんその後購入した物もあるでしょうが、税金でやっていることですから。

最近になって日本政府も少し反省したのかどうか、外国公館の従業員は無料にすることを決めたようです。しかし肝心の日本人には有料である。こういう不思議な国が日本です。

こういうことで良いのでしょうか。今すぐ実現するのは無理であっても理想の実現に向かって努力するという姿勢が大切である。社会教育に対する理解のある政治家はいないのでしょうか。日本の博物館のこれからのあり方を考える場合、よそと比較しながら、と同時に博物館自身の本質もよく反省しながら考えていかなければなりません。今申し上げた入館料はその一例にすぎませんが、中には学校等の施設（大学の博物館等）も入館料を取っています。大学の博物館で入館料を取るなどというのはヨーロッパでは聞いたことがないですね。有名なドイツのフンボルトという大学の博物館では、私が夕方の5時頃入館したにもかかわらず女性の職員が親切に案内してくれました。化石標本の所でしたが、それが発見された時の様子とか、その生物の生きている時の生態だとかを説明して下さいました。その態度に私は感心致しました。たった一人の観覧者の為に、しかも5時過ぎになっても説明して下さる等ということは日本では考えられないことです。そういう発想すら見られない。これは非常に残念なことです。

東京大学では最近たくさんの資料等をお作りになっています。それが将来の学校の博物館として無料で公開され、日本人の社会教育の資料として役立つようになればと思います。現在は博物館の歴史から考えると成長期にあると思います。成長期であるということは将来に希望があるということです。日本の経済力、日本の自覚から考えますと、そういう日が必ず来るに違いないと私は期待しています。

同じことを利用の方法において考えますと、例えば「学芸員」という言葉はヨーロッパでは通用しなくて、「ミュージアム・ティーチャー」という方が通用します。博物館教師、つまり博物館を担当する教育者です。その使命は今のように入収とか保管とか分類とかの他にもっと大事なこと、教育行為があります。教育行為を自覚した博物館職員である教師が育つことがこれからの学芸員の一面の大きい目標だと思います。それと共に研究者でなければならぬ。研究者であることが学問を理解し、次の新しい学問への基本を作る大きい夢の源泉でもあるからです。しかしまず教育者であることを忘れるな、それが優先的であります。その上でその教育の為に研究するという、そういう研究者の養成に努める、その意味で皆様がお習いになった博物館法という法律について考えてみますと、あの法律

を読んだ方で「これで日本に立派な博物館が出来るな」あるいは「立派な博物館の従業員として指導的役割を果たす学芸員として適任だと思われる人」がいるのでしょうか。まず第一に博物館概論、これは常識的にあるということでしょう。博物館実習、これも実際に博物館の従業員になる為の実習ということで必要でしょう。しかしそれと同時に教育的なものとして教育原理論とか、理論などの分野の科学系統の学科も必要でしょう。今の大学の教育で一単位の講義など出来ますか？どうしてなのでしょう。一講義は一単元で4単位が原則であります。講義というものはカステラのように1/4に切れるものではないのです。ことに短大などでやっている学芸員養成は学芸員補を作るための教育をやるのですから何分の1などと時間で計算出来ません。むしろ1単位であっても1/4の1単位ではなく全体を勉強させる必要があるのです。その意味である法律は間違っています。

大英博物館これは世界一の博物館であり、同時に世界一の蔵書を持っている図書館でもあります。ここも無料ですが、その理由を学芸員であるミュージアム・ティーチャーに教えてもらったのですが、博物館は博物館独自の社会教育方針を作っていて、それは英国政府の考え方に左右されないものであるということで、その指導書（これは英語で書かれてあるのですが）をもらって帰りました。博物館はその目的に従った物を収集し、教育行為を行います。いろいろな座談会、映画の試写会、観劇等も行います。視覚に訴えるというのが最近の流行でもありますが、その目的としているのは「人間完成」の教養の大事な部分を担当しているということです。これは日本では考えてもみなかったことです。良いことだと思いました。博物館の学芸員をしながら、何を教えるかということ、どういうことを郷土の人達に還元出来るかということを考えてみるだけでも必要ではないかと思えます。日本の文化の成長の中で博物館はまだ未完成の未成長の学問であるといった理由がこの点からも当てはまるかと思えます。まだまだこれからやらなければならない宿題を残しているといえます。現在に満足せず、私らは私らでもっと良心的に、もっと好感のある、教育効果の実際にある教育を観覧者に与えて、そして博物館を出て頂くようにしたいと考えるのでございます。

そういう意味におきましては逆に小さい博物館あるいは郷土館などで、学芸員の良心によってそういう効果を上げることをやっている館があります。そのような博物館では、「ただ何かを展示すればよいというのではなくて、展示したその物が何故展示しているのか、何故選ばれたのかということ、生活の一部だからです。その生活とは何なのかをそこで感じさせる意味でこれからの博物館がある」といった学芸員がいました。その通りだと思いました。回りを回転ドームにして珍しい物を遊泳させて驚嘆の声をあげさせるだけでは教育の効果はない。それは見せ物にすぎない。私は何かを教えてもらう、何かとは知識です。知識を啓発される所、それが博物館でなければならないと思っております。これからは「もの」を語る博物館にしていかなければならないと思えます。そういうことを考えていくと次から次へときりがなくなっていきますが、宿題が多いということは希望が多いということであり現在が不完全であるということになります。現在に満足してはいけないうことです。いかにして不完全な物を完全な「もの」に近づけるか、それをいずれ考えるのではなく、今考えましょう。そして今日から実行しようということをお互いにやらなければ永久に出来ないだろうと思えます。

実は最近科学が、科学にもいろいろありますが、工学機械の科学、分析の科学、物理学もありますね。それが博物館の特に学芸員の持つ技術の中に入りこんできています。とんでもないような技術が必要となってきています。それによって、珍しい、新しいことが入っ

てきて、世界を開くような時代になってきました。特に最近の発掘の考古学においては現在までの法律で必要とされている学芸員の資格の教養ではとても追いつかないようなことになってきました。いろいろな展示品の価値を調べる科学的分析とか、年代生命、血液型、指紋照合等の究明においてもです。何処かで木棺が発見された時にそれを見てきただけではダメで、だれが何故それを作ったか、何故残っているのか、何故酸化しないで（腐らないで）炭化現象なのか、この「何故」が必要なのであります。疑問をもつこと、その疑問が学芸員の解説によって初めて氷解した、そういう博物館が理想であると考えのです。もっと科学の力を利用することによって、単に考古学や歴史学の問題だけではなくもっと広範な物を知ることが出来るのではないかと思います。

私の親戚に大学で歴史科学をやりまして、今は文化財の研究をやっている者がおります。平城京や平安京の建築用材の断片を分析、研究したりしておりますが、それによって、ウソだと思えるようなことをそれが語ってくれるというのです。自分がやってきた科学の世界では常識なのに考古学では何故気付かなかったのか。そういう点に焦点を合わせなかったのか。思考の中にすきまがあるのです。考古学はおそまつな断片的な瓦礫を積み上げるような学問ではないと思います。又学芸員とは何かを考える意味において、その内容、教養の在り方を考えてみますと、それは生活の在り方、人間生活に繋がります。真理探求とかいわれますが、結局は私達の明日の幸福発展の為に学問があるのだと思われまます。教育もまたそうです。

その意味において、博物館は大事な思考の出発点で基礎知識を与えるところであり、社会教育的価値が非常に高いと思います。それを博物館に従事する者がどの程度自覚しているかが問題であり、私自身の問題でもあります。一緒に考えましょう。そして実りある成果を得て日本の博物館事業を内容的に質の高いものとして残していけるような方向を私達で歩みながら決定し、発展していきましょう。

学問は広く、深く、一人では達成出来ないものです。その為に学会は必要であります。忙しくとも学会に出席し、情報伝達に利用しましょう。

(当講演は平成4年度・全日本博物館学会研究大会における記念講演の記録である。)

(金山喜昭記)